永訣の朝

宮沢賢治

作者

宮沢賢治

明治二十九（一八九六）年～昭和八（一九三三）年。詩人・児童文学者。岩手県稗貫郡里川口村（現花巻市豊沢町）に、父政次郎、母イチの長男として生まれる。家業は質・古着商。盛岡中学校時代（明治四十二年～大正三年）には短歌を制作した。大正三年、島地大等編の「漢和対照妙法蓮華経」を読み、感動した。盛岡高等農林学校時代（四年～九年）には片山正夫の「化学本論」に啓発され、座右の書となった。六年、同人雑誌「アザリア」の活動に参加し、深く親交することになる保阪嘉内と出会う。九年、純正日蓮主義を主張した在家の仏教団体である国柱会（田中智学が創設）に入会した。

十年一月から八月まで東京に滞在し、国柱会の奉仕活動に参加する。「詩歌文学を得意とするのならば、その詩歌文学の上に純粋の信仰がにじみ出るようでなければならぬ」という示唆を受け、法華文学の創作に没頭した。妹トシの喀血の報を受け帰郷。十年十二月から十五年の三月まで稗貫（後に花巻に改名）農学校教師となる。代数・農産製造・作物・化学・英語・土壌・肥料・気象等を担当した。十一年十一月二十七日、トシ死去。深刻な衝撃をうけた。十三年、「春と修羅」と「注文の多い料理店」を出版。

花巻農学校を退職したのち、下根子桜の別宅で独居自炊生活をし、農事講演や肥料相談、楽団の演奏練習等の文化活動を本格的に始めた。羅須地人協会時代である。昭和三年、無理が重なり病臥。原稿の推敲や文語詩を創作する。やや体調が戻り東北採石工場の技師となるが、喀血。「雨ニモマケズ」を手帳に書いたのは、六年十一月三日のことである。療養を続けていたが、八年九月二十一日、死去。国訳妙法蓮華経一千部を印刷し、友人知人に配布することを、父に遺言した。

作者を解くカギ

高村光太郎は宮沢賢治を「コスモスの所持者」と呼んだ。賢治の作品において確かにコスモスの運行に身をゆだねる、ある種の愉楽を読者は感じることができる。地方的、個的であることがそのまま普遍的、人類的であるという共存の秘密は、コスモスの原理がミクロからマクロに至るまで、科学的にまた宗教的に通じ合う論理として捉えられているからであろう。生前賢治は〈心象スケッチ〉「春と修羅」と〈イーハトブ童話〉「注文の多い料理店」の二冊しか出版せず、未発表の原稿が膨大に残されていたわけだが、筑摩書房版「校本　宮澤賢治全集」に続き「新校本　宮澤賢治全集」が完結し、別巻の補遺・索引も出版された現在、賢治の度重なる推敲の過程をたどれるようになり、賢治文学の多角的な魅力がますます注目されてきている。

出典

本文は「新校本　宮澤賢治全集　第二巻」（筑摩書房　平七）によった。

「心象スケッチ　春と修羅」は自費出版で大正十三年四月に出版された。「永訣の朝」はこの〈心象スケッチ集〉に所収。十五年十二月の「銅鑼」にも発表されている。

主題

臨終を前にして愛する妹が求めた「あめゆき」が持つ意味を思い、今度はこんなに自分のことばかりで苦しまないように生まれてくる、という妹に報いる生き方を決意する。この「ゆき」が天上のアイスクリームとなって、妹とみんなに「聖い資糧」をもたらすのであれば、「わたくしのすべてのさいわい」を犠牲にしてもかまわないと思うことで、「わたし」は妹の死の悲しみに耐える。

臨終の妹と彼女の死を迎える「わたし」との「あめゆき」を媒介にした深い交感。

構成

「わたくし」の心の中で反芻される（　）内の妹の言葉と、「わたくし」を視点とした情景描写と心情独白から成っている。「わたくし」の今いる場所は、庭の御影石材の上で、松の枝に積もった雪をとろうとしている。少し前の出来事の回想、幼児期の過去へ向かう意識、そして未来へ向かう意識という時間意識が見られる。

場面展開は次のようになっている。

《前半部》庭先にたたずむ「わたくし」の心に、少し前の出来事が反芻される。その反芻によって促される今の「わたくし」の決意

（初め〜二八九・7）

「わたくし」は庭先に立ち陰惨な雲から降ってくるみぞれをながめている。（屋外）

（二八九・8〜二九〇・2）

妹の願い求めた雨雪を取りに外に飛び出した少し前の出来事の回想。（室内から屋外へ）

（二九〇・3〜12）

「わたくし」は妹が願い求めた「雪のひとわん」の意味を理解し、これからの自分の生き方を決意する。

《後半部》現在から未来へ向ける意識

（二九〇・13〜二九一・13）

松の枝のみぞれを妹の「さいごのたべもの」としてもらっていこうとする行為についての独白。

（二九一・14〜二九二・10）

想起される病室で苦しんでいる妹の姿と妹のいった言葉

（二九二・11〜終わり）

「ふたわんのゆき」が「天上のアイスクリーム」になって「おまへとみんな」の資糧となることを祈る。

指導上の注意点

●二八九ページ

問 **繰り返される「（あめゆじゆとてちてけんじや）」は「わたくし」にとってどのような意味の変化をもたらしたのか。場面に即して説明しなさい。**

答 もともとは激しい熱や喘ぎの中からもれた言葉で、渇きを癒す意味と理解されていた。そのため一刻も早くという思いで飛び出したわけだが、庭に立ち、「わたくしをいつしやうあかるくするために」という妹の本当の気持ちを理解する。そして四度目の「（あめゆじゆとてちてけんじや）」では宇宙とつながる結晶としての雨雪と捉えるようになる。

問 **「あめゆじゆ」を盛る器は「ふたつのかけた陶椀」だが、なぜふたつなのか。**

答 いもうとと「わたくし」の陶椀を用意し、別れに際しての「雪のさいごのひとわん」をそれぞれ共有しようとした。そして「おまへとわたくし」のふたつは、雪が天上のアイスクリームになることによって「おまへとみんな」とに意味を変えていくことが願望された。

補 「おまへとみんな」とあるように、妹とみんなの分が用意されるのである。

語句の研究

●二八九ページ

0永訣の朝　「永訣」は永別、死に別れの意味。トシと死に別れた日の朝。

2とほくへいつてしまう　死んでこの世からいなくなってしまう。妹の魂が天上の世界に転生してほしいという願望。

4あめゆじゆとてちてけんじや　「あめゆきとつてきてください」という賢治が付けた共通語の註がある。「けんじや」は「けろじや」がさらに訛ったものと推察される。幼児語をリズミカルに組み立て、リフレインを用いることで、賢治とトシの兄弟の絆を過去に遡らせ、緊迫した臨終場面と重層させながら二人の幼児体験を回想的に再現しているのではないか、という相馬正一の説もある。

8蓴菜　スイレン科の多年生水草。別称、ぬなは。長い葉柄の葉は水に浮かび裏面が紫色でぬめりがある。夏に水面近く紫色の花を付ける。芽、若葉は食用となる。

11まがつたてつぽうだまのやうに　病室から庭に飛び出した「わたくし」の行動の軌跡。妹の願いをかなえようと心せく心理の形容との複合した表現。「チユンセはまるで鉄砲丸のやうにおもてに飛び出しました。」（「手紙　四」）、「ジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあがりました。」（「銀河鉄道の夜」）という用例もある。

●二九〇ページ

3蒼鉛いろ　蒼鉛は、ビスマス（bismuth）。金属元素の一つ。赤みを持つ銀白赤色。半導体、触媒、ヒューズ等に用いられる。代表的な輝蒼鉛鉱は銀白色不透明で金属光沢がある。「蒼鉛いろ」はこの色彩をいう。

4みぞれはびちよびちよ沈んでくる　「びちよびちよ」は水分を多く含んだことの擬態語。「みぞれはびちよびちよふつてくる」が「沈んでくる」へと言い換えられている。みぞれを横から見る視線と見上げる視線の違いを的確に表現している後で「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの／そらからおちた雪」という捉え方で、宇宙的な視野から雪を「そらからおちた」とみている。

5あああとし子　死のうとする妹に向けた胸つまる思いの呼びかけ。戸籍では「トシ」。明治三十一年十一月五日生まれ。賢治の二歳年下の妹で、日本女子大学家政学部を卒業。大正九年九月より母校の花巻高等女学

問 ◉「ふたつのかけた陶椀」という表現から、どのようなことが分かるか。

答 作者と妹が、長い間、仲良く愛用してきたこと。

●二九〇ページ

問 「沈んでくる」とあるが、「ふつてくる」とした場合、印象がどのように異なるか。

答 「ふつてくる」は室内から見える雪の様子を捉えているが、「沈んでくる」は外に出た「わたくし」に向かって降ってくる雪の動きの印象を捉えた表現となっている。

問 「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」に含まれる「そら」が、「あんなおそろしいみだれたそら」であるのは、なぜか。

答 みぞれの降る「そら」の異常さを強調している。「おそろしいみだれたそら」と「うつくしい雪」とのコントラストを鮮やかに示す。修羅の様相を示す空から清浄な美しい雪が生み出されるという感慨。

●二九二ページ

問 ◉「やさしくあをじろく燃えてゐる」とは、「いもうと」のどのような様子を表しているか。

答 火に例えられた妹の命が、燃え尽きようとしている、危篤状態でありながら、最後の力を尽くして熱に堪えている姿を「燃えてゐる」と表現した。兄へのけなげな思いや

校教諭心得となり、英語・家事を担当した。翌年六月より過労のため発熱、病臥。八月に喀血し、九月には学校を退職し療養生活に入った。十一年十一月二十七日結核のため、二十四歳で死去。トシに対して賢治は自分を「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」（「無声慟哭」）と思っていた。

11わたくしもまつすぐにすすんでいくから

「手紙　四」で「私」に手紙を言いつけた人の言葉として「チユンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇気を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。（中略）チユンセがもし勇気のあるほんたうの男の子ならなぜまつしぐらにそれに向つて進まないか」とある。

キー・ポイント　**あめゆきとってきてください**　この妹の依頼は「わたくしをいつしやうあかるくするために」と「わたくし」に理解されている。これは妹に何か尽くしてやりたい、という兄の気持ちを、妹がくんでくれたことに、兄が感謝しているかのように捉えられるかもしれないが、そうではないだろう。周りを明るくする雪の特性によって兄の悲しむ心を励まそうとして妹が頼んだのだ、と兄は理解したのである。さらにその雪は、「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」からのものであり、宇宙の運行の一結晶に触れることを意味する。狭い個の悲しみにとどまってはいけないことを、妹が知らせようとしたのだと理解したのである。

●二九一ページ

2ふたきれのみかげせきざい　「みかげせきざい」は花崗岩、御影石。硬く美しいので、建築石材や墓石に用いられる。

5雪と水とのまつしろな二相系をたもち　相には固相、液相、気相の三つがあり、このうちの二つの相が共存している系を二相系という。みぞれは雪（固相）と水（液相）の二つの状態で共存している。「ふたきれのみかげせきざい」にあぶなくたっているさまと、二相系の保たれた状態が共通している。

9さいごのたべものをもらつていかう　「取っていこう」「持っていこう」ではなく、「もらう」という言い方に自然からの頂き物という敬虔な意識が表されている。「わたしたちは、氷砂糖をほしいくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、

補 りを抱きながら横たわっている様子。高温の炎の色である青色で妹の激しい熱のさまを表すとともに、澄んだ炎の美しさをも表している。

問 **この詩では、妹の言葉が郷里の方言で引用されている。これは、どのような効果をもたらしているか。**

答 愛する妹の臨終に際しての肉声が直後、作者の心に訴えかけ、その肉声を通して愛惜し、また感謝や誓いの気持ちを抱くようになっていく作者の姿を、印象的に読み手に伝える効果。

桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。」（「注文の多い料理店」序）とあるように、自然現象は食べ物、飲み物として感受されている。

11 みなれたちやわんのこの藍のもやう　「青い蕈菜のもやうのついた／これらふたつのかけた陶椀」を言い換えたもの。「かけた」や「みなれた」に幼児から今まで二人が共に辿ってきた時間が反芻されていることが分かる。

13 Ora Orade Shitori egumo　「あたしはあたしでひとりいきます」という注を賢治は付けている。詩集印刷用原稿には初め「おらおらでしゅとり行ぐも」とあったが、ローマ字表記に変更した。この方言だけローマ字表記にした理由を小沢俊郎は次のように説いた。「そのことばが賢治の耳に音としてだけ響いたことを示しているのであろう。知らない外国語を聞いた折のように、その音声が意味を持たないもののごとく聞こえた。ということは、それほど、聞き手賢治の気持にとって異質のものだった、ということになる。」「とし子は、自分の死をはっきり見つめ、正面から死に対峙していた。周囲の一人だって回復の見込みがないなどと言いはしなかったのに、死を直覚し、死と向き合っていた。しかも、怖れていず、自己放棄もしていなかった。兄や家族たちと別れて、一人だけ先に死んでゆくほかない事態を、はっきり認識していた。とし子の、その凛とした気持が、人間の究極の孤独を直視して Shitori と言い、己が死を egu（行く）と呼んだ点に認められている。」『Ora Orade…』の一行を間に挟んで、ほとんど同じことばが繰り返されている。／・もうけふおまへはわかれてしまふ／・ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ／一見似ているこの二句が、意味の上では大差なくとも、気持の上では大きな隔たりを持つ。『もうけふおまへはわかれてしまふ』は、この蕈菜の模様のちゃわんも見られなくなってしまうとし子の気持を思いやる嘆きである。『ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ』は、死別の厳しさを改めて自ら認識した詩句である。『ほんたうに』をつけて、同じことばを繰り返さなければいられなかったのは、『Ora Orade Shitori egumo』というとし子の認識の正しさを認めなければならなかったからである。」（「小沢俊郎　宮沢賢治論集　2 口語

詩研究」）

15あのとざされた病室の／くらいびやうぶや／かやのなかに　当時、肺炎や結核などの場合、安静と保温のため冬でもかやをつり、屏風でかこった。

●二九二ページ

2やさしくあをじろく燃えてゐる　「燃えてゐる」は熱を出し体全体が火照っている状態をいうが、それは命の炎ともいえる。「やさしく」は死を自然に受け入れているとし子の心持ちを感受したところからくる。

「あいつはちゃうどいまごろから／つめたい青銅（ブロンヅ）の病室で／透明薔薇（ばら）の火に燃される」（「恋と病熱」）。

6あんなおそろしいみだれたそらから／このうつくしい雪がきたのだ　暗い雲のたちこめる空と白い雪との鮮やかな対比、暗い空から純白の雪が来る、自然の摂理の不思議さを痛感している。

8うまれでくるたて…　「またひとにうまれてくるときは／こんなにじぶんのことばかりで／くるしまないやうにうまれてきます」という賢治の注がある。現世では若くして病にかかったことを悔やみ、もし来世で再び人に生まれたら、自分のことばかりで苦しむことのない人生を送りたいという意志を語った言葉。詩集印刷用原稿では、一旦ひらがなをローマ字表記にしたが、再度ひらがな表記とした。

13天上のアイスクリームになつて　賢治の所蔵本では「兜卒の天の食に変つて」と直されている。兜卒の天とは、衆生を済度する弥勒菩薩の住む所をいう。その天界の食料。日本女子大学在学中に発病したトシを看護し、父に病状報告をした手紙にアイスクリームが出てくる。「昨夜は体温も三十八度二分食慾無く渇き甚しき様には御座候へども元気変りなく医師より許可を得て、（寧ろ重湯の代りとして）アイスクリームを食し候」（大正八年一月六日）。

14おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに　「みんなの幸」への祈り。「注文の多い料理店」の序にも「わたくしは、これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。」とあるように、「おまへ」一人だけではなく、「みんな」へその祈りは向けられている。なお、詩集本文にも賢治の手入れ本にも「聖い資糧」に振り仮名は付けられていない。「聖い」は用語の意味から「きよい」と読める。「資糧」については、「しりょう」と読めるが、意味内容から「かて」という読みが当てられることも多い。

15わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ　「みんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」というジョバンニの心に通じる願いである。

鑑賞

「春と修羅」の序は「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／（あらゆる透明な幽霊の複合体）／風景やみんなといつしよに／せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です／（ひかりはたもち　その電燈は失はれ）」と書き始められている。

賢治は「春と修羅」を詩集とは呼ばず〈心象スケッチ〉としたが、この序からもなぜそのように呼んだのか、その原理が示されている。

生きている「わたくし」を現象とみなし、電燈の「青い照明」と捉えたのは、交流電燈が五十分の一秒、六十分の一秒の速さで点滅しているという科学的現象に基づいている。生命も生滅を繰り返しており、さらにその因果の現象は一身の有機体の内部にも起こっているのである。賢治は有限なこの身体（電燈）に、無限の光が明滅するというふうに考えていた。〈心象スケッチ〉とは、そのせわしく明滅する心象をそのままにスケッチしようとする試みであったのである。

トシの臨終を詠んだ「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」は、「春と修羅」の多くの詩の日付が、（　）で記されているのに対して、《　》となっている。この表記はスケッチしたものを、新たな構成と主題意識をもって、再生させたことを表していると杉浦静は推測している（「宮沢賢治　明滅する春と修羅」）。

「永訣の朝」のバックに繰り返し響いてくるのは、とし子の「（あめゆじゆとてちてけんじや）」という声である。庭先に立つ「わたくし」の脳裏に刻まれ、反芻されている。この妹の願いを「わたくし」は、確かに引き受ける。「おまへ」と「わたくし」の個にとらわれた枠から、個を含みこんだ「みんな」へと祈りは深められる。「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」の空から落ちた雨雪が促す宇宙感覚が、その祈りの深まりを促す。「わたしのけなげな」「わたしのやさしい」妹は、わたしはわたしで一人行きます、と決然といい、また自分のことばかりで苦しんだ、腑甲斐ない生を申し訳なく思ってさえいる。「わたしの……」というこだわりは、妹のほうにはすでにない。

妹は「雪のさいごのひとわん」を兄に頼み、「わたくし」は「ふたつのかけた陶椀」をもってみぞれの中に飛び出す。そして妹がたべる「このふたわんのゆき」に「わたくし」は祈る。「ふたわん」への固執は妹への兄のこだわりを表してもいようが、この「ふたわんのゆき」は「みんな」への通路となる。「おまへとみんなとに」という意識はそこから来る。「正しいねがひに燃えて／じぶんとひとと万象といつしよに　至上福祉にいたらうとする」宗教情操へ向けた思いなのである。

「松の針」では、「わたくしといつしよに行けとたのんでくれ」という願いを妹に呼びかけており、個へのこだわりから抜け出ているわけではない。「無声慟哭」では、修羅にある自分の確認と、葛藤する心をそのままみつめようとする、覚悟が記される。深い悲しみはそう簡単に制御したり解消されるものではない。この後、「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」「鈴谷平原」「噴火湾（ノクターン）」の挽歌群が続き、妹の死をどう了解したらよいか、

探索する心象スケッチとなる。

《ギルちやんまつさおになつてすわつてゐたよ》
《こおんなにして眼は大きくあいてたけど
ぼくたちのことはまるでみえないやうだつたよ》
（略）
《お日さまあんまり変に飴いろだつたわねえ》
《ギルちやんちつともぼくたちのことみないんだもの
ぼくほんたうにつらかつた》
《さつきおもだかのとこであんまりはしやいでいたねえ》
《どうしてギルちやんぼくたちのことみなかつたらう
忘れたらうかあんなにいつしよにあそんだのに》

この「青森挽歌」に突然、混線したかのように挿入される「ギルちやん」を巡る会話は、濃縮された悲しみが子供の語り口で伝えられる。この会話の深い味わいは、子供の語り口だからこそ実現できた、いわば賢治童話のエキスとでもいえるものである。この「ギルちやん」はとし子の幻像と考えられる。その幻像はこちらからただひたすら見えるが、あちらからはこちらが意識されていない。そして通信は、届かないのである。《みんなむかしからのきやうだいなのだから／けつしてひとりをいのつてはいけない》という信仰上の思いは「わたし」の念頭にある。そして「あいつがなくなつてからのあとのよつひる／わたしはただの一どたりと／あいつだけがいいとここに行けばいいと／さういのりはしなかつたとおもひます」と結末に記しているが、この強い自己抑制は、苦しい判断である。「みんなの幸」を求める方向は示されているが、「どこかにかくされたとし子」を思う気持ちを消せない。そういう賢治を包みいやすのが、イーハトヴの自然であった。

「ここは銀河の空間の太陽日本　陸中国の野原である」とは「農民芸術概論綱要」の一節だが、イーハトヴは、銀河という宇宙的な視野から捉えられた賢治の心象中の「ドリームランドとしての日本岩手県」であった。「春と修羅」の末尾の詩「冬と銀河ステーション」は街道のひのきから凍った雫が燦燦と降り、スペクトルの光満ち溢れる中、銀河軽便鉄道の汽車が進む風景がスケッチされている。地上も銀河の空間そのものとして含まれているのである。

「よだかの星」「グスコーブドリの伝記」「銀河鉄道の夜」等の作品には、「わたくしのすべてのさいはひ」をかけて願う「永訣の朝」に通じる祈りが読み取れる。「永訣の朝」の祈りは生涯続くほど深いものであった。

参考

・**「新校本　宮澤賢治全集　第二巻」筑摩書房　平七**

「松の針」

さつきのみぞれをとつてきた
あのきれいな松のえだだよ
おお　おまへはまるでとびつくやうに
そのみどりの葉にあつい頬をあてる
そんな植物性の青い針のなかに
はげしく頬を刺させることは
むさぼるやうにさへすることは

どんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ
おまへがあんなにねつに燃やされ
あせやいたみでもだえてゐるとき
わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた
（*あゝいい　さつぱりした
　まるで林のながさ来たよだ）
鳥のやうに栗鼠（りす）のやうに
おまへは林をしたつてゐた
どんなにわたくしがうらやましかつたらう
ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言つてくれ
おまへの頬の　けれども
なんといふけふのうつくしさよ
わたくしは緑のかやのうへにも
この新鮮な松のえだをおかう
いまに雫もおちるだらうし
そら
さはらかな
（ターペンティン）terpentine の匂もするだらう

（一九二二、一一、二七）

*ああいい　さつぱりした
　まるではやしのなかにきたやうだ

（注）terpentine　テレピン油。松材を水蒸気蒸留して得られる揮発性芳香の精油。

参考文献

❊教師用

「新文芸読本　宮沢賢治」山内修編　河出書房新社　平二
「宮沢賢治　プレオシン海岸からの報告」入沢康夫　筑摩書房　平三
「宮沢賢治　透明な軌道の上から」栗原敦　新宿書房　平四
「宮沢賢治　明滅する春と修羅」杉浦静　蒼丘書林　平五
「宮沢賢治　心象の宇宙論」大塚常樹　朝文社　平五
「宮沢賢治　幻想空間の構造」鈴木健司　蒼丘書林　平六
「宮沢賢治『春と修羅』論」奥山文幸　双文社出版　平九
「新宮沢賢治語彙辞典」原子朗　東京書籍　平十一
「言葉の流星群」池澤夏樹　角川書店　平十五
「宮沢賢治の文学と思想」秋枝美保　朝文社　平十六
「《宮沢賢治》のさらなる彼方を求めて」天沢退二郎　筑摩書房　平二十一
「宮澤賢治イーハトヴ学事典」天沢退二郎他編　弘文堂　平二十二
「宮沢賢治探究」上・下　栗原敦　蒼丘書林　令三

❊生徒用

「宮沢賢治大事典」渡部芳紀編　勉誠出版　平十九
「図説　宮澤賢治」天沢退二郎他編　筑摩書房　平二十三
「宮沢賢治の世界」吉本隆明　筑摩書房　平二十四